

# 高等学校での授業実践の効果を高める教職課程科目間の連携

## — 東北工業大学教職課程センター「一日実習」と「教育課程論」の事例 —

中島 夏子\*

### Collaboration of Teacher Education Courses for effective Teaching Practice Training at a High School: A Case Study of a One-day Teaching Practice Program and “Curriculum Theory” Course at Tohoku Institute of Technology

Natsuko NAKAJIMA\*

#### abstract

The purpose of this article is to introduce how a one-day teaching practice program has been conducted by Teacher Education Center at Tohoku Institute of Technology. One of the features of the program is that it has been planned and implemented by close relationships with Sendai-Jonan high school and by collaboration with the “Curriculum Theory” course. It not only enabled students to do good teaching practice, but also the “Curriculum Theory” course to be more practical.

#### 1. はじめに

平成 27 年 12 月 21 日に出された中央教育審議会の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高めあう教員育成コミュニティの構築に向けて—(答申)」【1】は、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である。」(p.16)として、実践や演習重視の授業にシフトし、教育実習だけではなく、学校インターンシップなどの学校現場を体験する機会等を充実させることを提言している。したがって、今後、このような体験をどのように充実させるかが教職課程の大きな課題となっている。

東北工業大学の教職課程では、既に平成 15 年度から「教育実習事前・事後指導」の一環として、3 年次後期に宮城県松島高等学校において「一日

実習」を行ってきた。「一日実習」は、教育実習で行う授業参観や授業実践等を、一日限定で経験するものである。この「一日実習」によって、学生たちは実践的な視点から学校や生徒、授業について学ぶことができ、4 年次前期に実施される教育実習に向けた良いステップとなっていた【2】。

本稿が対象とする事例は、場所を松島高校から東北工業大学と同一法人の仙台城南高等学校（以後、城南高校）に変更した、平成 27 年度の「一日実習」である。本稿は、それが具体的にどのような活動であり、そのためにどのような事前・事後指導を行い、そしてどのような結果が得られたのかについて、同事例の特徴である「教育課程論」との科目間連携に注目して、明らかにすることを目的とする。

#### 2. 仙台城南高等学校での「一日実習」の概要

「一日実習」は東北工業大学の教職課程の 3 年次から 4 年次にかけて実施される必修科目「教育実習事前・事後指導」の一環として、3 年次後期に実施されている。前述の通り、平成 27 年度から城南高校において、本稿の執筆者である東北工

---

2016年10月25日受理

\*教職課程センター 准教授

業大学教職課程センターの中島夏子准教授を中心に、城南高校の探究科の千葉俊哉教諭と教務部長の水戸良広教諭の協力の下で実施された。その目的は「高等学校での一日を見学し、また、生徒との交流を体験することによって、教育実習への予備知識と心構えをつくり、教職に対する意識を高め、自らの志望を明確なものにする」(平成27年度「一日実習」実施要項)ことである。実施日時は、大学での行事によって終日休講となっていた、平成27年10月16日(金)の8時から16時までであり、教職課程の3年次学生23名が参加した。具体的な一日のスケジュールは【表1】の通りである。

【表1】 「一日実習」のスケジュール

8:05	城南高校の多目的室に集合
8:10-8:20	開講の挨拶
8:35-8:50	授業実践を担当するクラスの朝のSHRを見学
1・2校時 8:50-10:40	城南高校教員による講話 教頭「マネジメントについて」 教務部長「教員の仕事について」 生活安全部長「生徒指導について」
3・4校時 10:50-12:40	授業参観
12:40-13:20	昼食・休憩
5校時 13:20-14:10	授業実践のための準備
6校時 14:20-15:10	授業実践
7校時 15:20-16:00	「一日実習」の振り返り 開講の挨拶

「一日実習」のスケジュールは、城南高校の教員による講話、授業参観、授業実践の3つによって構成されている。授業実践は、城南高校の探究科の1年生の全5クラスにおいて、5～6名程度のグループになった学生たちが授業を行うものである。担当する授業は、「探究基礎」という探究科1年の中心的な科目であり、「大学・海外の学生・専門施設とコミュニケーションをとる中で、自分の視野を広げ進路選択の幅を広げる」ことを授業のねらいの一つとしている。そこで、大学で研究していること、高校と大学の勉強の違い、(大学生が考える)高校3年間で学んでおいてほしいことの3点を扱うことを通して、高校生の進路選択の幅を広げさせることを目標とする授業を大学生が担当した。

指導目標は共通であるが、どのような教材や指導方法を用いて授業をするかは学生たちに決めさせた結果、グループごとに様々な工夫が見られた。東北工業大学の学生にアンケートを実施し、その結果を教材として授業を行ったグループ、自

分達の日常の様子を元に大学生活を紹介するグループ、大学生活クイズを行うグループ、高校生のクラス集団をいくつかのグループに分けて、その中で個別に質疑応答を行うグループ等、どのグループにも工夫が見られた【写真1】。

【写真1】 学生の授業実践の様子



松島高校のロングホームルームで授業実践を行っていた時には、大学を紹介するという大きなテーマはあったが、その前後の授業とは独立していたため、学生達は自分達が担当する50分の中でどのような授業を行うかを考えるだけでよかった。しかし、城南高校での「探究基礎」での授業実践では、その科目や単元の目標、そして自分が担当する授業の前後の流れなども考慮する必要があったため、より教育課程の視点を持った授業計画が必要となった。

### 3. 「一日実習」のための事前・事後指導

学校現場や教職を体験させる機会を効果的なものとするためには、その事前と事後の指導を欠かすことができない。特に、高校生を前に授業実践を行うためには、指導案の作成や教材研究、授業練習などの準備をしなければならない。しかし、教員養成を主たる目的としない本学のような大学では、教職課程として利用できる時間は限られているため、どの時間を使ってそれを行うかが大きな問題となった。

「一日実習」が行われたのは「教育実習事前・事後指導」(1単位)の科目の中であるが、同科目は、それ以外にも教育実習についての説明や教育実習で担当する科目の指導案作成と模擬授業を行わなければならないため、「一日実習」で行う授業実践のための時間を確保することが難しい。したがって、これまでは、授業時間外にグループで集まって、そこに教員が適宜指導を行うという方法がとられていた。しかし、前述の通り、城南高校での「一日実習」で行う授業実践は、それまでのものより教育課程からの視点を必要とする





3 年次 前期	「教育実習事前・事後指導」 ・一日実習の事前指導（スケジュールの連絡、 課題の提示）
3 年次 後期	「教育実習事前・事後指導」の授業外活動 ・個人で作成した指導案の返却 ・グループごとに「一日実習」の授業実践の指 導案作成等の授業の準備  10月16日「一日実習」

事後指導としては、教育実習の日誌と同じフォーマットで実習日誌を書かせ、それを基にして、「教育実習事前・事後指導」の授業の中で、振り返りを行った。筆者が担当するグループでは、「一日実習」での反省を踏まえて、授業を実施する上での留意点についてグループディスカッションを行った。

#### 4. 「一日実習」の結果

学生達が行った授業実践は、大学生が授業をするというものの珍しさもあっただろうが、城南高校の生徒からの反応は良好であった。同校の担当教諭の話によると、「探究基礎」の授業の中で良かった事として生徒から挙げられることが多かったということである。その結果を受けて、次年度以降も同様の取組をすることとなった。筆者の目から見ても、授業としての完成度は全体的に高く、生徒の興味・関心を引く、よく準備された教材を作成しており、グループメンバー内での役割分担をしながら、適切な指導ができていた。

学生の「一日実習」での授業で学んだ事について、学生の実習日誌からいくつか抜粋をする。

指導案の時間通りに進められず、所々、予定していた発表内容をカットすることになってしまいました。しかし、臨機応変に対応できたことで、生徒に質問や問いかける時間はしっかり設けることができました。（中略）事前の準備はしっかりできていたと思っていましたが、実際はもっと練習が必要だったのかと思いました。（中略）実際に授業をする機会をいただけたことで、様々な事に気がつくことができました。（都市マネジメント学科・男子）

（授業をすることになった時、）最初に感じたことは生徒からの視線でした。今まで大学で行ってきた模擬授業とは異なり、30数名からの視線は（中略）私達を教師として見ているのだと改めて緊張感を肌で感じましたが、積極的に生徒に話しかけようと心に思いながら授業を進めることができました。（中略）一日実習を終えてみると、生徒に教えるといったことよりも生徒（中略）から学ぶことの方が多かった

と思いました。（知能エレクトロニクス学科・男子）

一日実習を通じて、教師の皆様のみならず、生徒達からも指摘を受け、授業内容の未熟さを痛感させられました。生徒の反応や態度から、自分が教える立場であるにも関わらず、逆に教わっているようなそんな感覚でした。（環境エネルギー学科・男子）

授業を計画・進行することの難しさや大変さ、生徒との交流の楽しさや難しさを感じました。（建築学科・女子）

どの学生も、生徒を前にして授業をすることの責任や難しさ、楽しさを実感しており、実践的な視点で授業を捉えることができるようになっていく。こうした感想は毎年、「一日実習」を通して学生達から聞かれるものであるが、一つ目の都市マネジメント学科・男子や四つ目の建築学科・女子の感想にもあるように、指導案と照らし合わせて授業の振り返りができている学生が多くいたのが、今年度の特徴である。

「一日実習」と「教育課程論」を連携した事による効果を、それがなかった前年度と比較する事は難しいが、学生達がグループで作成した指導案を見ると、「教育課程論」で作成した指導案を基にして作成されていることが多いことが観察された。その結果、3年次にグループで作成した指導案も、教員による指導は限定的であったにも関わらず、水準の高いものとなっていた。また、各自が原案となる指導案を持っていたため、グループでの話し合いが円滑に進むことも観察された。

以上のように、学生にとっては難易度の高い授業実践であり、そのための指導を「教育実習事前・事後指導」で十分に行えなかったにも関わらず、良好な結果が得られたのは、「教育課程論」との連携が奏功したと考えられる。一方で「教育課程論」にとっても、「一日実習」と連携することによって良い成果が得られたと考えている。つまり、「教育課程論」で扱う教育課程や授業に関する理論や事例は、2年次後期の学生にとってはまだ関心を持ちにくく、主体的な学習を促しにくいものであった。しかし、「一日実習」と関連付けることによって、一年後には授業を行う自分自身の問題として、より実践的な視点で授業に取り組む様子がみられたのである。このように、「一日実習」と「教育課程論」の科目間連携は、双方にとって良い効果をもたらしたといえる。

#### 5. おわりに

今後、「学校インターンシップ」を初めとして、

学校現場や教職を体験する機会を教職課程の中で提供していくことが益々求められることになるが、それを効果的なものとするためには、その事前と事後の指導を行うことが必要である。しかし、そのための時間を十分に確保することは難しいのが実状である。本事例では、このような場合に、教職課程の科目間で連携を図り、その中で事前指導に相当する学習を行うことを一例として示し、それが双方に良い効果を与える可能性があることを示した。

しかし、これを可能とするためには、教職課程の科目間の綿密な調整が必要である。この科目間の整合性・連続性は、中教審の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」【3】でも指摘されているように、教職課程全体の長年の課題であり、容易ではない。今回は、「一日実習」と「教育課程論」が同一の担当者であったからこそ連携ができたが、担当者が異なる場合には、より困難を伴うことが予想される。この課題は「一日実習」に限ったことではなく、実践的指導力の基礎の育成を目指すにあたっての共通の課題であるといえるだろう。したがって、こうした科目間の整合性や連続性に取り組んでいくことを今後の課題としたい。

## 参 考 文 献

- [1] 文部科学省中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高めあう教員育成コミュニティの構築に向けて—（答申）」, 2015 年 12 月 21 日.
- [2] 佐藤三之, 中島夏子「東北工業大学における学校との連携による教職課程の事例—県立高等学校での「一日実習」の取り組み—」, 東北工業大学紀要Ⅱ：人文社会科学編, 第 34 号, pp.39-46, 2014 年 3 月.
- [3] 文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」, 2006 年 7 月 11 日.